
第1章 東南アジアで見出した生態で旧世界を 区切った高谷好一の2020年代における今日性： 身体を通した日常の言葉で現象を捉え 未来を語り続けて

1991年の11月に恒例の比叡山会議が開かれた。「比叡会議」というのは、京都に関心を寄せる人たちが出席して、自由に討論を行うフォーラムである。その年の総合テーマは『諸文明の時代』（中略）。基調講演を角山栄さんがされ、河上倫逸さんが「世界史の中の諸文明」という題で話され、私が「世界地理の中の諸文明」という題で話題を提供した。私は自分では納得のいく発表をしたつもりだったが、あまり好評ではなかった。焼畑地帯の文明をヨーロッパの近代文明と対峙させて描写し、さらに、将来の世界のことを考えると、「豊かな心の文明」である焼畑文明こそヨーロッパ文明より可能性を持っていると論じたのである。

だが、これは出席者の多くには、「東南アジア屋」の暴言と聞こえたらしい。上山春平先生からは「高谷君、気持ちは分かるけれど、もう少し他人に理解されやすく話さないといけないよ」といわれた（高谷 1997:218）。

海外学術コロキウムでは、東南アジアを商業的多雨林多島海の世界、アフリカを閉鎖的農牧大陸として対比する高谷好一の問題提起が大いに議論を呼んだ。コロキウムに参加したアフリカ研究者の側では、大まかで荒っぽすぎるアフリカ理解であるとして反発が強かったように思う。しかし高谷は、むしろ意図的に大まかな特徴を基礎に据えて比較を試みたのであろう。「地域研究の一つのやり方は、できるだけ鮮明にその地域の特徴を際立たせ、比較することである。たとえ、実際には極めて複雑なものであっても、単純化し、地域の売り物をはっきりとさせ、こうして相手にも理解してもらい易い形にして、比較をしていくことである」。だから「アフリカと東南アジアの違いはライオンと船だ、ぐらいのところから考えてみる！」（高谷 1996:4-5）ということであった（掛谷 1999:402）。

1. はじめに

高谷好一はフィールドで物と物、現象と現象を直接比較して類似性と差異性を引き出す才能のある人だった。これは多くの研究者が持たない資質である。上掲2例とも広大な地域の比較であるが、決して外来コンセプトを介在させず直接比較をしている。しかし比較が大規模になるとアカデミズムの枠組を最優先事項とする研究者から批判を浴びやすかった。以下、高谷が作品を作っていく姿勢・奮闘、アカデミズムとの関わりを中心として、高谷自身が20世紀的な常識に捕らわれながら、それでも2020年代の潮流に連なる思考を追求した姿勢を見ていきたい。

高谷は1934年3月18日に滋賀県守山市で生まれた。京都大学理学部を経て、同大学院理学研究科を修了し、その後京都大学東南アジア研究センター助手・助教授を経て、1975年より同教授に昇格した。1995年から2004年まで滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科教授、2005年より聖泉大学総合研究所所長・教授を務めた。2016年3月12日、滞在先のインド・チャンディーガルのホテルにて81歳で没した。本章が扱うのは1990年代までの高谷の思考である。

2. 研究姿勢・方法

高谷がセンターに着任直後の1966年、石井米雄は高谷について次のように記している。

センターに新しく着任したばかりのTさんが、調査のためにバンコクにやって来た。Tさんは京大理学部地質出身で、学生時代に探検部長をつとめたという根っからのフィールドワーカーである。

初対面のTさんについては驚いたことがたく

さんある。まず彼が日本から持ってきた鞆は、私のために持ってきてくれたという煎餅の缶を取り出してしまうと、あとはほとんど空っぽに等しかった。20キロの重量制限をいつも気にしながら旅行の用意をした自分と比べて、まずその差の大きさに度肝を抜かれた。

徹底したTさんの旅行態度は、着替えをほとんど持ってきていないことにも表れていた。洗濯して乾くのを待ちさえすれば、よけいな着替えなど不要である。というのがTさんの経験則にもとづく信念であったようで、事実それを実践していた。旅装を解いたTさんはボールペンを一本買ってきた（筆記具さえ現地調達だ！）。それから町に出て、今度は一日がかりでバスの運行状況を綿密に観察し、その結果をフィールドノート代わりのカードに克明に書き留めた。こうしてTさんは、またたく間に私以上のバンコク通になってしまったのである。

このTさんと一緒に東北タイを旅行しながら、私は地形の見方の手ほどきを受けた。これまで文献だけを読んで歴史の勉強ができたつもりでいた私にとって、Tさんとの出会いは衝撃的なものがあつた。私はのちに農業を自然環境の利用と関連づけて、タイ史の新しい時代区分を提唱したのだが、そこで示された思想の原点は、この時にTさんとした東北タイ旅行の経験にある（石井 2003:139-140）。

この地形の見方について、桜井由躬雄は1980年代の思い出として高谷の地図の使用法を次のように書いている。

センターの高谷好一先生の研究室は変わっている。16畳ほどの天井いっばいに東南アジアの50万分の1の地形図が張り巡らされている。天井地図の下には大きな長方形のテーブルが置かれている。先生は手が休むとこのテーブルの上にあおむけになり、双眼鏡で地形図を追っていく。気球にのって大空から調査している気分になるという。ただし、先生はその地図がカバーするところはほとんどすべて歩いている。だから、双眼鏡下の風景がそのまま浮かび上がる。この奇妙で仙人のような作業の結果が高谷学と言われた地形分類であり、世界単位論であり、デルタ分類だ（桜井 2013:60-61）。

日本にいたとき、私は高谷先生に訊いた。先生のように、ちらりと見ただけで地域の地形を

すっばすっばと分析し、そこから農業のあり方、社会のあり方、ついには歴史の概観まで見通すようになるにはどうしたらいいですか。高谷先生は答えた。桜井さん、5万分の1の地形図にトレーシングペーパーをかけて、すべての情報を手書きしてごらんなさい、それが100枚くらいたまったら、地形区分とは何かが解ります。そのあとでまた付け加える。桜井さん、15万キロ走ったらまた話をしましょう。（中略）そのころは東南アジアの5万分の1の地形図を入手することは至難の業だった（中略）そういう高谷先生でさえ、地形図となれば旧日本陸軍作成の地図を使っていたくらいだ（桜井 2013:66-67）。

フィールドでの高谷の作業については、桜井をはじめとして多くの同僚が記憶を持っていた。学際共同研究でマイクロバスに同乗してフィールド調査を実施したのち、一行は昼間のストレスを晴らすために夜は酒盛りをするのが通例であった。しかし高谷はひとり黙々と、昼間書いたフィールドノートの内容を京大式のカードに書き写していた。また高谷は着替えを一組のみ持ち、夕方の水浴びの時に洗って干していたと言う。

3. フィールドワークの代表的成果

高谷は、前項に述べたような方法で地形、生態、土地利用をつぶさに見て歩いて書き留めたフィールドノートを利用して、地形分類法を編み出し、のちに景観学的手法として自ら認識するようになった。高谷自身が1980年頃になって、やっと地域研究らしいものをはじめるようになったと書いている（高谷 2001:454）。チャオプラヤ・デルタの地形分類と変貌を詳細に描いた『熱帯デルタの農業発展－メナム・デルタの研究－』（1982）は同僚の誰もが認める実証的地域研究の成果となった。さらに高谷は東南アジアの主要部について土地利用の概説書を書いた。『東南アジアの自然と土地利用』（1985）は研究者が自らの調査地域を東南アジアの生態の中に位置づけるため、あるいは東南アジア全体の講義をするときに大変便利であった。ただし現在では開発が大規模に進んで生態が大きく変化し、現状としてそのまま使用することはできなくなった。

高谷は歴史へも関心を寄せ、当時東南アジア研究センターの建物を利用して開催されていた「漢籍を読む会」、「東南アジア史学会関西例会」にも出席していた。このような歴史知識の蓄積の中で、中国史

研究者が「高谷ショック」と呼ぶ研究のブレイクスルーが中国史で起きた。桜井由躬雄は以下の様に誇らしげに描いている。

センター建設以来14年、鍛えに鍛えた地域学がいかほどのものであるか、ディシプリンに挑戦する機会が来た。そのころ私は地質学や農学を習う目的で、高谷先生と毎晩、中国の農業技術書を購読していた。そのなかで先生がこれまでの東洋史で定説となっていた農業史理解がおかしいと言いつつ出した。先生や福井氏によれば、中国古代の農法、火耕水耨はボルネオ山地で今も行われる水田焼き畑のことだし、宋代の大輪中圩田は粗雑な馬蹄形輪中にすぎなくなる。占城稲はアウス系のときなし稲になる。漢文を精査しても先生の言い分は正しい。むしろ今までの農業を知らない歴史家の漢文の読み方が間違っていたのかもしれない。これはいける。社会学の坪内助教授が中心になって、日本中の高名な農業史家を招待することになった。(中略)会議は(1979年7月)3日にわたった。東南アジア研究者のやや粗雑な指摘に対し、天野先生をはじめ東洋史学者はいずれも真摯な対応を繰り返し、私の学者人生の中でもっとも価値あるシンポジウムとなった。この討論の結果は、1985年に『中国江南の稲作文化』(桜井・渡部編集、日本放送出版協会)から上梓された。のちに森正夫教授(名大)が、戦後東洋史最大の革命の一つと評された(桜井 2013:55-56)。

高谷はまた名エッセイストでもあった。東南アジアの人々の暮らしや考え方を日本の一般の人々に解りやすく、生き生きと描いた。東南アジアの人々にとって何が大切か、日本人は何を学ぶべきか。日本とは違う稲作の方法、放浪生活の在り方を市井の人に解る言葉で書いた。『マングローブに生きる－熱帯多雨林の生態史－(NHK ブックス 563)』(NHK 出版、1988)、『コメをどう捉えるのか(NHK ブックス 602)』(NHK 出版、1990)、がこれである。一般の日本人が当たり前と思っている日本の稲作や農民の生活を、東南アジアを含むアジアの稲作の中に位置づけて相対化したうえで、日本における米の自給問題など関係する時事問題について知識人としての意見も言う。その背景には、東南アジアなど日本と異なる地域の人々の価値観と地域の性格を聞き取るうまさ、自分で出会った様々な世界の価値観を比較して

書くうまさにあったと思われる¹。この資質を持つ地域研究者は少ない。そしてディシプリンに拘泥する研究者に対して、地域の総合性、地域研究そのものが議論の武器になる。

しかし次に述べるように、「世界単位」を枠組としたより大きな規模の比較では、高谷の特性が生きずに逆効果となった。

4. 世界の中に位置づける苦闘

高谷は1990年代から世界の中に東南アジア世界を位置づけることを試みるようになった。「世界単位」という用語を使用して、高谷が東南アジア研究で開発した生態史によって旧大陸を地域区分した。しかしこの試みは大きな問題をはらむこととなった。自分の体験から出た言葉と世界の多様な世界を比較することの間には越えなければならない問題がいくつもあったのである。これを20世紀に上梓された次の新書2冊で検討してみよう。

『新世界秩序を求めて－21世紀への生態史観－(中公新書 1110)』(中央公論社、1993)

『多文明世界の構図－超近代の基本的論理を考える－(中公新書 1339)』(中央公論社、1997)

このうち前者は、高谷が自身の地域研究第一作と述べ、また東南アジア研究センター在職中に同僚数人が手を入れた書であるので、これを主に使用して以下の検討をする。

『新世界秩序を求めて－21世紀への生態史観－』の中で述べられる欧米社会由来のコンセプトへの違和感の表明と批判は、出典が記されていないので高谷が自分の言葉にした表現と言える。しかし抜き出してみると以下の様にどこかで聞いたようなものばかりであり、前掲の2冊のNHK ブックスのような生態学者高谷ならではの、我々を啓発する視点はない。

「人間中心主義、合理的思考、科学技術、経済発展」(高谷 1993:2)。

「万物の霊長である人間は経済発展をしてこそ人間としての意味があるのだ、という呪文」(高谷 1993:3)。

「いつの間にか近代合理主義と経済発展は普遍原理になっていたのである。合理的思考と科学技術と経済発展、これこそはまさに20世紀の世界が進むべき大道ということになった。」(高谷

1 高谷のあとがきによれば、この2冊の書籍の編集者の力量もまた大きかったようである。

1993:3)

(ダーウィンの進化論)「二つの個体がある場合、それは生き残るために必ず競争する。すると強い者、優秀な者が勝ち、それが次代に生き残っていく。競争こそは進化の原動力であると認められたのである。進化は社会学者や一般の人々の間では進歩に読み替えられた。競争そのものは決して悪いことでも何でも無い、競争の結果、優秀な者が勝つのは世の摂理であり、それから進歩が生まれてくる。」(高谷 1997:6)
「合理主義こそすべてであると主張した科学者たち、(中略)彼らは人間と対象を完全に切り離して理論を展開」(高谷 1997:215)。

この2冊の新書の中で、高谷が独自の視点を持てなかった理由はいくつか考えられる。第一に、「世界単位」は高谷の考えから出た概念ではなく、1980年代末から矢野にエンカレッジされて考え始め、矢野が主張する構図をほぼ引き継いでいる(高谷 2001:456-457)。(ただし高谷は矢野亡き後の21世紀に入っても東南アジア世界のグローバルな位置づけを希求して世界単位に関する本を書き続けたので、のちにはこの概念を自分のものとしたと言える。)第二に、見聞できなかった事象について様々な文献の参照が必要なところを、自らの原則とした自分の言葉による表現を文献の引用なしに貫いたためと思われる。第三に、日本における高谷のエリート性が挙げられる。西欧近代を直接の心身の痛みとして感じ体の中を通した言葉として、体験したことがなかった可能性が大きい。高谷の原稿を修正した同僚達もおそらくそうであったろう。彼らは京都大学に職を得た研究職の男性教授であり、家事育児その他の雑用、さらには現在と比較するならば学内行政からも解放されていたのである。

高谷は本書で近代世界システムに覆い隠されている多文明世界を描く試みを行い、東南アジア、中国、そして日本における世界単位の区分を示した。「世界単位」の語の下に人間社会が生態を生存基盤としている具体例を並列したのである。最終章では世界単位同士の共存について議論し、世界単位間の調整の難しさを語る。この規模の調整を歴史的経験や先行する理論の蓄積を利用せずに自分の体験から出た言葉のみで語ることに無理がある。

5. 高谷の20世紀的制約

世界単位について主観と独断が過ぎること以外にも、高谷には、近年の人文の歴史学が「欠如モデル」

と呼んで批判の対象としている専門職の姿勢が垣間見える。すなわち権威者として壇上から一方的に研究成果を述べるだけでよく、読者、聴衆と対話する必要はないという態度である。

第一に、世界単位を書く目的、そして今、なぜ世界単位が必要か、世界単位を提示すると従来と何が違うのかの説明がほとんどない。高谷は世界単位を使用すると「近代世界システム」に「隠されていた個別論理の中からは、病める現代社会にとっての特効薬が発見されるかもしれない」(高谷 1993:10)と書く²。さらに世界単位を提示すると従来と何が違うのかについては言及がない。世界史の簡便な地図とどこが違うのかの説明がなく、各事例についても他の事例・文献資料との比較がない。高谷の文章を推敲した同僚の研究は地の文に取り込まれる一方で、他研究者の調査事例・議論が参照されていない。NHKブックスと比較すると生態の重要性が当然の前提とされて説明がない。新書2冊は、東南アジア発の世界単位を流布させることが最優先事項であったのかもしれない。

第二に、自分の体験を通した言葉の徹底も、規模の大きな比較の時にポリシーとして固執しすぎると、主語の大きい一般論となり、異なる見方を受け付けない姿勢となる。

環境問題、南北問題、人権疎外、心の腐敗、等々である。これらの問題の原因は明白である。経済発展はよいことだということで、誰も彼もがより豊かでより便利な生活を求めすぎることになったからである(高谷 1993:3)。

地球上のすべての人がより贅沢な家に住み、より立派な自動車を運転しようというのだから、たまったものではない。(中略)挙句の果ては金持ちになりすぎた社会では今度は心の荒廃が起こった(高谷 1993:3-4)。

このレベルの経済状態に達することのできない人、病気・障害のある人、シャドウワークを担う女性は、これらの表現を読んで異なる立場を封殺された気分になるだろう。本章の冒頭の比叡山会議の聴衆はおそらくハイレベルの知識人だけだったと思われるが、高谷の、西欧は人間を万物の霊長とする一神教だ大陸部東南アジアの山岳焼き畑地帯は汎神論なので優しさと潤いがあるという議論(高谷 1993:99)は、西欧に詳しい聴衆が一神教や優しさと潤いについて

2 この議論は矢野の議論であった(高谷 2001:456)。高谷は「私はすっかり洗脳されてしまった。」と書いている(高谷 2001:457)。

様々な疑問を持つかもしれないと予想する周到さが存在しない。いずれにしても一個人の短期的体験、理解を主体として一方的に語る限界が見える。

1980年代に20代30代前半の学生・研究者が持った、日本における高谷の印象は、静かであるが芯が一本通った厳しさを宿し、笑った顔はめったに見せない。講義・講演の時は遠くを見るまなざしで、自らが体験した用語で語ると言うものであったが、たしかにこれらは聴講する者を意識した対話的態度とは言えない。

第三に、東南アジアでの調査における対話・意見交換がほとんどない。これは20世紀後半に可能であった調査形態に大きく依存するが、そのうえで次が指摘できる。調査する人とされる人の区分は明確で、調査された人々は成人男子が主である。調査対象者は個人として描かれ家族や村のなかの階層、生活の具体的あり方はよくわからない。当時高谷がインタビューできたのはエスタブリッシュされた成年男子だったという限界は当然のこととしても、様々な見解が表出する可能性のあるグループインタビューの方法はとられなかった。一方、議論は研究チームや同僚と行われた。

西欧的普遍主義を嫌った高谷にも以上のような専門職にかかわる20世紀的制約があったと言える。

6. 高谷の今日性

しかしその一方で、高谷の議論や方法の中には21世紀に入り、特に2020年代の日本で重視されるようになったトレンド、なかでも文化人類学のトレンド・問題とほぼ同様な点が含まれている。それは調査する自己に関わるものである。

第一に、高谷は調査者を含む人間が自然環境から切り離されることについて生態の論理を取り上げて批判している。

「合理主義こそすべてであると主張した科学者たち、(中略)彼らは人間と対象を完全に切り離して理論を展開」(高谷 1997:215)

「彼(今西)が地球はひとつの全体だ、それは人間もその中に取り込んだひとつの全体だ、(中略)自然と人間は切り離せないのだから、人間はより大きな自然の動き、生態の論理に従ってこういうのが「生態論理」である。」(高谷 1997:216)

「自然の中で生きていく人間と言うものをまともに考えようではないか。」(高谷 1997:217)

高谷は生態と人間の身体・心を連続して捉えており、有限な体と心のある人間は環境への適応から解放されることはないを考える。研究者も例外ではなく環境が変わると研究者である自らも変わる。研究者は調査者であるとともに調査対象の生活人でもあるのである。

私は勿論今も地域研究をやっている。ところでこの分野は実に捉えどころのない分野である。学問かどうかさえ判らない。少なくとも机の上だけでは納まりきらないものであることは間違いない。今の私の場合だと、私自身の故郷への帰還が最大の問題になっている。この帰還はまだ始まったばかりだから、これからどんどん問題が出てきて、私自身が変わるはずである。こうして、今の言動は過渡的なものにならざるをえないのである(高谷 1997:221)。

高谷はある時期から、超然とした観察をありえないこととし研究者としての仕事と日常を分けなかった。日本における文化人類学が21世紀に展開した問題を1990年代に既に新書で論じていた。すなわち「私」という語を使用し、さらに「地域哲学」のすすめ³の節(高谷 1997:205-211)では、他の社会との共存を展望して日本社会における自己修正のダイナミズムを議論している。文化人類学のオートエスノグラフィ⁴、開発人類学・文化人類学者(小國 2003; 清水 2024)が「私」⁴を登場させて調査社会とその変化を記述する動向、そして時代は遡るものの1960年代

3 「伝統を守りながらなおかつ現代に生きるにはどのようにすべきか、と言ったことが重要な問題になってきているのである。

私は自分の父親の葬儀と家の新築の話を少し紹介したが、底でも十代にはいろいろの問題があった。例えばこんなことがあった。一部の人たちはそんなものは不合理な虚礼だから廃止すべきであると主張した。べつの人たちはいやそれはよき伝統だからぜひやるべきだといった。後者は隣人が新築を祝福するのはそれ自体で気持ちのなごむことだし、それにこういう機会を捉えて、近所の付き合いを深めておくことは実際的にも役に立つことだと主張した。日ごろからそういう付き合いがあるからこそ、例えば、若夫婦が老いた親を家に残しておいて、勤めに出ることができるのだといった。付き合いという行為を通して近所での互助システムが実質的に機能しているのは良いことだと言うのである。

私はこの議論に巻き込まれて、ひどくしんどい思いをした。そして、近江のような小さな自形型社会も自己修正を繰り返していると実感し、同時に、こうした自己修正があるからこそ、他の社会との共存の可能性も出てくるのだ、と思わせられた次第である。」(高谷 1997:207-208)

4 清水は著書のなかで一人称の「私」を使用し、小國は「わたし」への考察を44-46頁で行う。

から提唱され始めた「個人的なことは政治的なこと」と問題意識を同じくしていた。ただし高谷は東南アジアで長期の定点調査をしていず、かつ調査時期が20世紀だったこともあり、東南アジア社会での自己修正ダイナミズムは議論していない⁵。

もとより自らの思考で調査対象の総体を描くこと、それらを比較してグローバルな全体のなかへ位置づけること、そして個別研究の意義を探ることは人文学の歴史、地域研究、そして文化人類学が重視している作業である。また体内で感知される非言語的情報や沸き起こる感情に言葉を与えるのは詩人や小説家の方法である。高谷は理系出身であるにもかかわらず、価値観を含めた社会の在り方全体と、それを世界へ位置付けること（日本の相対化、欧米に対する東南アジアの対等性）に深い関心をよせ、これを自分の頭で考えることに終生固執した。自らフィールドワークの成果をより良き未来のために利用すべく高谷自身および故郷の近江、東南アジア、その他の地域を世界に位置づける希望と困難は、近年の人類学者が自らの調査研究をグローバルに位置付ける際の問題と通底している（清水 2024:264-282）。

第二に、高谷は自らの調査方法・考え方を開陳し、社会の在り方にも意見を示す。しかも方法論においては道半ばの戸惑いとともに、借り物の方法でないことにこだわり、批判を承知でひとりで方法を編み出した。これは地域研究者として少数派の姿勢である一方で、世界的な価値の転換期にあって考え方の多様性・対話の担保が必要な2020年代においては、勇気ある貢献となる。

以下、1993年新書10-14頁に書かれる高谷の方法論を要約する。

- ・世界単位（＝文明生態圏）は生態環境・そこに住んだ人間・外来文明からなり、同一の世界観を共有する人たちが住んでいる範囲である。
- ・地域研究の成果は「科学的に厳密な処理を経た産物と言うよりもむしろ芸術家の作品に似ている。その意味では一般の学者からは非科学的なもの、虚像だと非難されるかもしれない。しかし、私としては、地域研究とはこういうものしか出しえないのだと主張したいのである。」地域研究の「個別の本質的な部分は個人の感性や洞察によってしか捉

えられないのである。」

- ・芸術家の描いた絵は「外見の正確さに欠けることもある。しかし、不思議とその雰囲気や、時にはそこに住む人の心の中までを実に見事に描き出す。」
- ・調査地域の世界観について調査者は調査者でではなく、世界観を科学的に感知することはできず、解決しようがない。しかし「可能な限り虚心になって「彼」に向き合ってみよう。そんなとき、突然向こうがメッセージを送ってくれるのを感じる瞬間がある。」
- ・非科学的方法であっても、「じゃあ他にどういう方法があるのだ、これしか方法がないじゃないか。」くわえて「いわゆる科学的検討の併用」をする。そして「何人かの人たちの作品が生まれてきたら、その展示会をやったらよいではないか。」

以上の様に、高谷は本質を描き出すことに執着した。しかしグローバルなうねりが山奥の村落へも到達したことが明らかな2020年代から見ると高谷の描くジャワ世界などは静態的である。高谷の主要な調査が行われた冷戦期1970、80年代に村は大きく変わらないという議論の前提があったようであり、これも時代の制約と言えよう。桜井も1990年代までベトナム村落をそのように考えていたようである（桜井2013:185-191）。

高谷の地域研究が学問ではなく芸術に近い作品であると議論することについては本章「おわりに」で検討することとして、ここでは科学の前進した2020年代において高谷の方法が一部であれ科学的根拠を持つ可能性が出たことを指摘しておこう。

第一に、「可能な限り虚心になって「彼」に向き合ってみよう。そんなとき、突然向こうがメッセージを送ってくれるのを感じる瞬間がある。」は執筆当時には他の研究者に荒唐無稽なことであつたろう。しかし21世紀に入って脳科学が発達し、高谷の体験が科学的に起き得る可能性が開けている。

第二に、高谷は「木が靈気を発して、人間と共感する」（高谷 1993:169）と述べ、二つの体験談を披露する。高谷自身の経験として巨木の根圏には巨木の霊のようなものが満ちていたことこれと自分が繋がっているような気がしたことを述べ、またスラウェシ島ゴロンタロの長老が次のように述べたことを書く。「砂糖ヤシはプライドの高い木だが、かれがその近くに、それより低いカーストのココヤシを植えてしまった。そこでその砂糖ヤシはその後拗ねている。」（高谷 1993:169）これらもまた荒唐無稽の様に聞こえるかもしれないが、スザンヌ・シマードの『マザー

5 高谷自身の仕事と生活を分けない姿勢、および社会の自己修正ダイナミズムの議論は1997年出版の新書に集中して書かれており、1995年以降の滋賀県への帰還とそこでの体験が高谷の考えを大きく前進させたと思われる。また1980年代には東南アジアの村落は大きく変化しないものと観念されていた。

ツリー 森に隠された「知性」をめぐる冒険』（三木直子（訳）、2023、ダイヤモンド社）では樹木と菌根菌がコミュニケーションしながら協力して生き延びていることを議論している。高谷の体験に科学的根拠がある可能性が出てきたのである。

さらに高谷は7章立ての第6章で世界単位の捉え方を説明するが、第一節の生態基盤を考える、において社会の価値観の構築に、生態基盤が与える恐怖と言う人間の最も原始的な感情が関わっていることを示す。照葉樹林の森は周囲50メートルが見渡せず全体が暗いことで恐怖を感じる。そして様々な物語が作られ、超自然の力の源泉ともなることを述べる。逆に砂漠や草原で恐ろしいのは人間、すなわち外敵である。これに対して故郷すなわち自分の居場所には安堵・安心を感じる。価値観の構築の根底に感情を据えるのは第三章で取り上げる土屋健治の方法に近いが、感情もまた2020年代になって日本で注目されるようになったテーマである。

7. おわりに アカデミズムとの関係の行方

アカデミズムとの関係は高谷の持つ第三の今日性と言える。高谷の方法論の要約から明らかなように、高谷は自分の論じている世界単位がアカデミックでないと言われれば、世界単位に関する思考を追求してアカデミズムを降りる姿勢をみせた。そして晩年まで自らの仕事を作品と呼んだ（桜井 2013:236）。

高谷本人は科学であることを必要としなかったが、小説とはことなる芸術的な作品や一般的啓蒙書という選択肢のほかに、大きな枠組や仮説を提出する高谷の思考過程の報告としてアカデミズムの地域研究の一部とならないであろうか。一方、地域研究全体について100%エビデンスを必要とする科学である必要はあるのだろうか。ちなみに批評が学問の根幹である人文学は今世紀、科学という表明をやめている（Human science → Humanities）。いずれにしても高谷の方法論の開陳は、21世紀において地域研究の社会的意義は何かを考えるきっかけの一つとなる。

次も社会的意義を考えるきっかけとなる。学問の制度化、マニュアル化は十分なエビデンスの獲得が必要な知的生産を効率的にする。しかし2020年代は価値観の巨大な変動にあって、制度化した学問によって立つ基礎的土台が揺らいでいる一方、人口減少の日本では、知的生産に優先順位をつけていく必要がある。今、なぜこれをするかの説明責任が問われる時、以下の高谷の考え方は重要である。

自分で考えると言うことは苦しいことである。あ

まりの苦しさに、しばし逃れたいくなる。他人まかせにしたいこともある。しかし、そこを頑張るのである。こうして、いったんやり通してみるとそこから大きな収穫が得られる。一度それをやってみると、生きるということはいかに痛みがともなうものかということを知ることができる。自分が痛みを感じてみると、他人の痛みも感じられるようになる。私はこのところが大変大事だと思っている。

現代社会で最も大きな問題の一つは、人々が痛みを避けすぎることである。肉体的苦痛や精神的苦痛は原始的なものに付随したもので、それから脱却することが進歩だ、と人々は考えている。そう考えて、いろいろの仕掛けを作ってきた。道具、装置、組織。これらに頼っておれば自分は体を張らなくてもよく、楽である。普遍論理と言うのも同じである。これに頼っておれば自分で考える必要はない。オウム返しにそれを繰り返しておればよい。楽である（高谷 1997:208-209）。

高谷は晩年まで研究の意味、意義を考え抜こうとする姿勢を崩さなかった。

たぶん私にできることは「生態の意味を突き詰めてみる」と言うことです。今一つは「百姓とは何なのか」を考えることです。作品にはならないかもしれませんが、これしかないと考えています。（2012年11月）（桜井 2013:236）。

この考え方は、梅棹忠夫、川喜田二郎など京都学派フィールド派の「自前の思想」に連なるものかもしれない（清水・飯嶋 2020: 第7、8章）。そして高谷の主張する意味の追求と身体を経由した思考は、人間にできてもAIにはできない、あるいはできるようになるまでに長い時間のかかる作業である。

高谷の世界単位論関係の作品は当時、東南アジア研究センターの同僚からも実証がないと批判され、今も厳しい批判を浴びている。その意味で高谷は東南アジア地域研究者のアカデミズムからも離れた。しかしその一方で21世紀に、京都大学学術出版会から数冊の「世界単位」に関わる一般書を出版しており、一般の読者に需要があったと考えられる。これはどういうことか。21世紀における高谷の中での思考の進展と時代状況については別の機会に追ってみたい。

参考文献

高谷好一の主な著作

- 高谷好一. 1982. 『熱帯デルタの農業発展－メナム・デルタの研究－』 創文社.
- 高谷好一. 1985. 『東南アジアの自然と土地利用』 勁草書房.
- 高谷好一. 1988. 『マングロープに生きる－熱帯多雨林の生態史－』 (NHK ブックス 563) NHK 出版.
- 高谷好一. 1990. 『コメをどう捉えるのか』 (NHK ブックス 602) NHK 出版.
- 高谷好一. 1993. 『新世界秩序を求めて－21世紀への生態史観－』 (中公新書 1110) 中央公論社.
- 高谷好一. 1996. 『「世界単位」から世界を見る－地域研究の視座－』 京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 1997. 『多文明世界の構図－超近代の基本的論理を考える－』 (中公新書 1339) 中央公論社.
- 高谷好一 (編著). 1999. 『地域間研究の試み－世界の中で地域をとらえる－』 京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 2001. 『新編「世界単位」から世界を見る：地域研究の視座』 京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 2004. 『地域学の構築－大学改革の基礎－』 サンライズ出版.
- 高谷好一・安土優. 2004. 『二人の湖国－安土優の作品×高谷好一の美しい湖国－』 サンライズ出版.
- 高谷好一. 2006. 『地域研究から自分学へ』 京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 2010. 『世界単位論』 京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 2017. 『世界単位日本－列島の文明生態史－』 京都大学学術出版会.

- 石井米雄. 2003. 『道は、ひらける－タイ研究の五〇年－』 めこん.
- 小國和子. 2003. 『村落開発支援は誰のためか：インドネシアの参加型開発協力に見る理論と実践』 明石書店.
- 掛谷誠. 1999. 「東南アジアをどう捉えるか (5) アフリカ世界から」 坪内義博 (編著) 『「総合的地域研究」を求めて：東南アジア像を手がかりに』 京都大学学術出版会. 399-415 頁.
- 桜井由躬雄. 2013. 『一つの太陽－オールウエイズ－』 めこん.
- 清水展. 2024. 『アエタ：灰のなかの未来：大噴火と創造的復興の写真民族誌』 京都大学学術出版会.
- 清水展・飯嶋秀治. 2020. 『自前の思想：時代と社会に応答するフィールドワーク』 京都大学学術出版会.
- スザンヌ・シマード (著). 三木直子 (訳). 2023. 『マザーツリー：森に隠された「知性」をめぐる冒険』 ダイアモンド社.
- 土屋健治. 1991. 『カルティニの風景』 めこん.